

縄文時代の佇ま 豊かな自然に囲

		B.C.9,000		B.C.3,000		B.C.1,000		A.D.300		A.D.800		
		B.C.13,000		B.C.5,000		B.C.2,000		B.C.300		A.D.600		
日本	旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期					
北海道	旧石器時代	縄文時代						続縄文文化	縄文文化		アイヌ文化圏	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		オホーツク文化	ドビタイ文化		



大型^{たてあな}竪穴建物跡や盛土遺構のある大規模な集落跡

大船遺跡は、函館市中心部から約30km北東の太平洋に面した南茅部地域の大船地区に所在しています。遺跡は大舟川西岸の河口付近の標高30~50mの海岸段丘上に遺された、縄文時代前期の終わりから中期の終わりにかけておよそ1,000年間にわたり生活が営まれた大規模な拠点集落跡です。平成8（1996）年度の発掘調査によって、竪穴建物跡をはじめ多数の遺構や多量の遺物が見つかり、その後の調査を経て、当時の生活や生業を知る貴重な遺跡として重要性が認められ、約7.2haが平成13（2001）年8月13日に国の史跡に指定されました。

本遺跡ではこれまでの発掘調査によって100軒以上の竪穴建物跡や貯蔵穴や墓など多数の土坑、大規模な盛土遺構が見つかり、土器や石器など約27万点にのぼる遺物が出土しています。竪穴建物跡は大舟川に沿って帯状に連なるように分布していて、同じ地点を繰り返し集落として利用したため多数の遺構が高密度に重なり合うとともに、大型で深い竪穴建物跡が多く存在しています。特に深いものでは深さ2.4mを測るものもあり、他の地域と比べても大きな特徴となっています。また、これらの竪穴建物跡と遺構から出土した土器を詳細に分析してみると、遺構と土器が連続して変

遷しているのが捉えられました。なかでもこの時期は囲炉裏（^{じしやうろ} 炉）の変遷が顕著で、直接地面を火床とするもの（地床炉）から土器を埋めたもの（埋甕炉^{まいようろ}）、石で囲ったもの（石組炉^{いしぐみろ}）、またはこれらが複合したものが存在していること、そして屋内祭祀・儀礼の空間と考えられる施設も時間とともに変化していく様子が捉えられ、長期間にわたり安定した定住性を示すものと考えられます。

集落の北側には長さ約80mにおよぶ大規模な盛土遺構が集落に沿って存在しています。ここからは盛り上げられた土砂とともに、多量の土器や石器、動物の骨やクリなどの植物など多数の遺物が出土しています。これらは単なるゴミ捨て場ではなく、使った道具や食料となったモノの魂をあの世に送る「送り場」と考えられる空間です。



大船遺跡 大型竪穴建物跡



大船遺跡 クジラ椎骨

いを感じる まれた遺跡

福田 裕二 (ふくだ ゆうじ)

函館市教育委員会生涯学習部文化財課
兼世界遺産登録推進室 主査(学芸員)

1967年函館市生まれ。90年駒澤大学文学部歴史学科(考古学専攻)卒業。
91年南茅部町教育委員会学芸員。2008年教育委員会生涯学習部文化財課
勤務、14年10月～16年3月函館市縄文文化交流センター副館長兼務、16
年度から現職。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

動植物の利用

太平洋に面した南茅部地域では、90以上の縄文遺跡が登録されていて、これまで多くの遺跡で発掘調査が実施されてきましたが、貝塚は未だに発見されておらず大きな謎です。しかしながら大船遺跡からは、クジラやオットセイなどの海獣類やマグロなど魚類、タマキビガイやマガキなどの貝類など、水産資源の利用を示す動物遺体が出土しています。竪穴建物跡や盛土遺構からもクリやクルミをはじめ多くの植物遺体や花粉などが見つかっています。特にクリは炭化した実が多数出土したほか、火災にあった住居の構造材のほとんどがクリ材を使っていたことが判明しました。

クリはそもそも北海道には自生しておらず、縄文時代前期頃に本州から縄文人によってもたらされたと考えられています。大船遺跡の裏山は現在でも「栗ノ木山」と呼ばれていて、おそらく当時の集落周辺に植えられたものが自生したのかもしれませんが。こうした食料資源を示す遺物からも長期間の定住を可能にしたこ



大船遺跡から出土した土器

とが窺えます。

整備と活用

大船遺跡では、平成19(2007)年度から21(2009)年度にかけて整備事業を実施しました。主な整備として、多くの遺構が見つかった区域は「縄文のにわ」として竪穴建物跡や盛土遺構などの復元を行っています。また、遺跡の西側は当時の植生を再現する「縄文の森」として、市民のみなさんの協力を得て植樹した木々が育っています。また、遺跡の南側には「体験学習広場」を設けて、土器の野焼きなどに活用されています。

現在でも遺跡周辺は豊かな水産資源や森林資源に恵まれていて、秋には大舟川でサケの遡上を見ることができ、当時の佇まいを感じることができます。南茅部地域には道の駅を併設した函館市縄文文化交流センターで北海道唯一の国宝「中空土偶」に出会うこともできます。歴史ロマン溢れる函館で、さらに古代の息吹を感じてはいかがでしょうか。

※ 史跡大船遺跡(大船遺跡管理棟)

住 所：函館市大船町575-1

電 話：0138-25-2030(函館市縄文文化交流センター)

入館料：無料(模型・パネル展示ほかトイレ・休憩スペースとして利用できます)

開 館：4月下旬～11月上旬 9時～17時(開館期間は無休)



大船遺跡「縄文のにわ」